

教室の 窓から



子どもと共に

精いっぱい

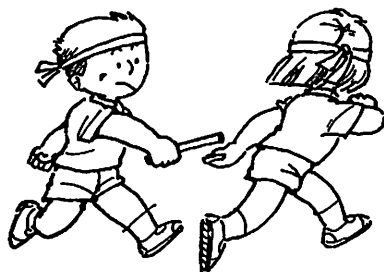
原 一 宏

平成十年度の新学期がスタートした。私にとって五年生は五回目になるが、恐しい事に自分の感覚が少しマヒし、マンネリ化しつつあることに気をつけねばと思う。新たなスタートをきれるかどうか、全て教師自身にかかわっている。子どもは教師を選べず、また教師も子どもを選べず、まさに偶然の一期一会の出会いである。このことのきびしさをもう一度、再確認する必要があるのかも知れない。

手良の子どもたちは実に明るく、人なつこい。瞳はキラキラと輝いている。そしてその眼は青々と澄んでいる。この子たちに負けないようにいつも明るく、キラキラと輝きたい。朝、早い子は七時十五分頃登校してくる。放課後は、校庭でよく遊んでいる姿が多い。教室へ入ると、ニコニコと元氣よい挨拶が返ってくる。日直当番の号令が響く。「今日も楽しいすばらしい一日にしましょう！」元氣の良い声に、朝からパワーッとしている私自身に気合いがかかる。子どもたちはよく笑う。気がつくと私も一語に笑っている。笑うことはすばらしいことだ。笑うと心にゆとりが生まれる。心も明るくなる。手良小に来て、この笑いを絶やさぬクラスにしようとする時思った。いつもニコニコと接してくれている子どもたちに頭が下がる。

陸上の練習で子どもたちと一諸にグラウンドを走った。勢いよく走り、担任の帽子が風で飛ばされた。しばらくすると、女の子が私の帽子をごく自然に拾って「先生、はいっ。」とにっこりほほ

えみ、手渡してくれた。そして、何事もなかったかのように女の子は、走り去っていったのである。時間にすれば、一瞬の出来



事であったが、私にとってとても心温まることであった。子どもたちのなにげないしぐさ、表情の中に、その子のすばらしさが出ている。

臨海学習での一泊は、子どもたちにとって

も私自身にとっても新しい発見があった。臨海学習に行く前に、寝相の悪い人を聞くと、何とほぼ全員の子が手をあげた。夜の来るのが少し心配であったが時計は夜九時三十分の消灯時間を指していた。部屋の中はまだにぎやかだ。

午前二時。さすがに寝しずまっている。それにしても子どもたちの寝顔を見た時、みんな仏様のような顔をしていた。おだやかな顔だ。布団の外で寝ている子、友だちの足を枕にしている子、布団と枕を抱えている子、確かに寝相は凄じかった。私はかぜをひかないようにそっと一人ひとりに布団をかぶせた。

我以外、みな師なり

小さき師から 学ぶべきもの多し。

子どもと共に 伸びていきたい。

(伊那市立手良小学校五年担任)